

バンシュのカーニヴァル

——ベルギーの冬祭りを訪ねる——



1 ヨーロッパの冬祭り

ヨーロッパの冬は、祭りの季節である。

かつて、フランスの民俗学者ヴァラニャックは、暦について「麦の収穫のあと、大地は死をむかえ再生しなければならぬ。種子は、大地の胎内におさめられた豊穡の力であり、この胎児は育まれなければならない。そこで、人々は大地にひそむ死者の魂や、他界から訪れる恵み深い者たちに、成長の助けを祈ったのである」と書いた。（注1）

この考え方は、柳田國男以来の日本民俗学の立場と一致する。たとえば日本の正月の場合にも、ゆずり葉にのって家々を訪れる「年神」は、祖先の霊であり、一年の農耕によっておとろえた田に新しいトシダマ（稲の魂）をもたらすものとされている。このトシダマが、現在の「お年玉」のルーツであると説かれるのである。

大地の死と再生の儀礼は、収穫や種まきの時期によって変化するが、北半球の場合には、太陽の死と再生とむすびつき、冬至を中心に祭りが行われることが多い。

日本の場合は、だいたい12月の8日あたりから正月の準備をはじめますが、ヨーロッパの場合は冬がすこし早い。かつてケルト族の間では、11月1日が農耕年のはじまりとされていたようである。この日と翌日の11月2日は、現在でも万聖節・万霊節という死者の祭りであり、日本の彼岸や盆のように墓参りをする。イギリスなどには、万聖節の前夜にハロウィーンという祭りがある。子供たちが、仮面をつけて家々をまわり物乞いをするこの祭りは、日本の冬祭りの行事とにているが、仮面は訪れる祖霊や神の姿をよくあらわしている。

冬の祭りは、さらにクリスマス、新年、カーニヴァル、四旬節、復活祭と続いていく。祭りは、キリスト教の典礼にしたがって行われるが、その背後にかつての「大地の死と再生の祭り」の姿をのこしている。

たとえばクリスマスは、新しい救い主の誕生日であると同時に、新しい太陽の生まれた日（冬至の祭り）である。復活祭は、キリストの死を悼み、再生を祝う儀礼だが、同時に大地のよみがえりを祝う春祭りなのだ。人々はそのために、四旬節という四十日にわたる厳しい物忌み（ものいみ）の時をすごす。これは、大地が死者の眠りにつく厳冬期にあたる。カーニヴァルは、この物忌みのはじまる直前に行われる祝祭である。

復活祭が終わると、ヨーロッパ全土は花につつまれる。豊かな光の季節がはじまるのだ。春を祝う五月祭（メイデイ）の柱が、門松のように森からきりだされ、村や町の広場に立てられる。六月には冬まき作物のとり入れがはじまり、夏至の祭り（聖ヨハネ祭）には、ドンド焼きのように火をたいて厄を払う。

八月は、ぶどうの収穫と聖母マリアの昇天の祝い。九月末の聖ミカエル祭は秋分の日の祭りであり、市がたち、十月には春まき麦の収穫が行われる。そしてまた万聖節のころには、冬まき作物の種をまき、新しい一年がはじまるのだ。

こうしたヨーロッパの祭りの姿を、ベルギーの小さな町バンシュのカーニヴァルをとおして、もう少しくわしく見てみよう。

2 バンシュのカーニヴァル

バンシュは、12世紀初頭に十字軍に参加したゴードワン三世の未亡人ヨランド・ド・ゲルドルによって築かれた。町をかこむ城壁は、ベルギー随一とあってよい。（図1）

カーニヴァルの記録は、1394年の市の古文書に「カレミオー（カーニヴァル）の夜に市庁でたくロウソク代として18ドニエ」という記録が見える。以後、中世期をつうじて文書が散在するが、近世にいたるまでバンシュのカーニヴァルがどのようなものであったかは不明である。たとえば1850年頃のものと考えられる仮面は、イタリアのコメディ・ア・デラルテ風のものであって、現在のものとは大変ちがう。しかし、1877年の祭りの仮面は現在のものに酷似する。（図2）

カーニヴァルの主役は「ジル」と呼ばれる美しく着飾った男たちである。ベルギーのシンボルである赤・黒・黄色の三色で彩られたライオンのコスチューム、レースの肩飾り、ダチョウの羽の帽子、「アペルタンターユ」とよばれる小さな鐘のついた腰帯、木靴、奇妙な眼鏡をつけた仮面、「ラモン」という柴の束、オレンジの入った籠。これらの由来は、ただ古いというだけで、確かなことは町の人たちにもわからない。

（図3）

「ジルになる」ことは、いまもバンシュの男たちの誇りである。ちょうど、神田に



図1 バンシュはフランス国境、近くの小さな町である

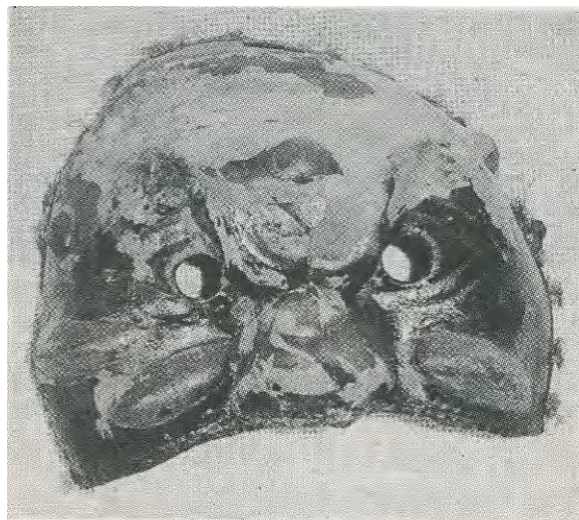


図2 オーギュスト・デルベ氏によって寄贈された古いジルの仮面

生まれた男たちが三社祭りの神輿をかつぐことを誇りとしているように、バンシュの男たちはジルになることを一生の願いとしている。

ジルになるには、いくつか難しい条件がある。

まず、バンシュの町で生まれの男のほかは「ジル」にはなれない。「ジルは、けしてバンシュの町を出ない」といわれている。

たとえば、バンシュの近郊の町にも「ジル」と同じような服装をした男たちの登場する祭りはある。しかし、それは本物ではない。

ブリュッセルの町のパレードや、大阪などの万博のデモンストレーションにもジルが登場する機会はある。しかしそこに出演するのは、いつも「偽物のジル」である。もし、バンシュの男がこうした折りにジルの扮装をして登場すると、バンシュの町では語り草となり、二度と祭りにうけ入れてもらえなくなる。

つぎに、経済的な負担もかなり重い。バンシュの男たちは、町の広場にあるカフェを本拠にして「ソシエテ」という組をつくり、定期的に会合をもち、「カニョット」という独自の積み立て預金で、自分たちが祭りにつかう費用を用意する。

ソシエテは現在八つほどあり、職業や地域などによらず気のあった者同士があつまる。これは、日本の祭りで神輿や山車（だし）をだすための講や宮座に匹敵する祭祀組織である。

こうしたジルの組織はもちろん、その他の場面でも教会はまったく関与しない。カーニヴァルは、反キリスト教的ともいえる世俗的な祭りである。男たちはカフェに集まって、ビールを飲みながら気長に祭りを準備する。祭りのコスチューム、仮面、木靴、ラモン、帽子などの道具を作る職人たちは、年ごとに組から注文をうけ、それだけで一年を暮らす者もある。

3 カーニヴァルの一日

祭りは、復活祭の49日前の日曜日から三日間にわたって行われるが、ジルの登場するのは、「脂の火曜日」と呼ばれる最後の日だ。

その朝早く、楽隊が小太鼓を打ちながら、町はずれに住む最初のジルを迎えにくる。ジルは木靴を踏みならし、踊りながら門を出てゆく。

つぎのジルの家の前になると、楽隊が「オーバード」という古い小唄を吹き、ジルは門口で祝福するように踊る。家の者は



図3 ナポレオン髭にサングラスという奇妙な仮面をつけた現在のジル



図4 通りで出会った知人に祝福を与えるジル

ジルを迎え入れ、シャンパンや御馳走をふるまう。ジルは、こうして同じソシエテの仲間の家をつぎつぎまわり、祝福をあたえ、祝福をうけ、しだいに町の中心にむかっていく。

家の門口でくり返されるジルの挨拶は、日本の祭りの三河万歳や獅子舞のような門付けの祝福芸を思わせる。

途中で知った人にあうと、手にもったラモンという木の枝をなげ、うけとった知人と抱きあって祝福をかわすのも印象的である。森の聖なる力を、木の枝と抱擁によって授けているように見えるのだ。(図4)

町の中心の広場に近づくと、ジルたちは一斉に仮面をつけ、市庁舎に入っていく。待ちうけた市長はジルの祝福をうけ、また祝福の言葉をおくる。

午後になると、ジルはダチョウの羽の帽子をつけ、大きな行列をつくって町を練り歩き、籠からオレンジをとって、見物人たちに投げあたえる。オレンジは今でこそありきたりで珍しくもないが、かつては貴重な果物で、北国を訪れる神のプレゼントであったに違いない。(図5)

こうして、木靴をならしながら、一日中町を踊り歩く姿を見ていると、ジルが神聖な来訪神を演じていることがよくわかる。彼らは、家をめぐり、友を訪ね、新しい年の祝福と恵みをあたえて去る。「ジルは、いかなる場合も楽隊なしには移動できない」「シャンパン以外の酒は口にしない」などという、さまざまなタブーの存在も、ジルが神であることをしめしているように思われる。

バンシュのカーニヴァルには、ジルのほかにも注目すべき点が多い。たとえば、「脂の日曜日」とよばれる祭りの初日には仮装行列がおこなわれ、男たちが化粧して「ママゼル」という女性を演じる。このグロテスクな扮装も、男と女という根源的な秩序を破壊し、新しい年の秩序を生み出す演出ではないだろうか。(図6)

またカーニヴァルの一週間前の月曜日は、「トゥルーユ・ド・ヌーユ」と呼ばれる仮面の夜である。人々は恐ろしい仮面をつけて知り合いの家をおそい、酒や御馳走を強要する。「トゥルーユ」は「汚れた人」を意味するのだが、これも日本のナマハゲのような仮面をつけた祖霊や死者の来訪をおもわせる。



図5 町の人や見物客にオレンジを投げるジル



図6 脂の日曜日に登場するママゼルの仮装

注1) Andre VARAGNAC, *Les Traditions Populaire*, Paris, PUF, 1978, p.39.

注2) Samuel GLOTZ, *Le carnaval de Binche et les archives communales*, in *Le carnaval en Wallonie, Fédération du Tourisme de la Province du Hainaut*, Mons, 1962, pp.37-49.